
生者の書(ジャファル×ニノ、マッシュー×レイラ→チャド)

ダフネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生者の書（ジャファル×ニノ、マシュー×レイラ↓チャド）

【Nコード】

N1723B

【作者名】

ダフネ

【あらすじ】

マシューが主人公です。マシューが、亡き恋人レイラにそっくりな女性と出会う所から話は始まります。

女は暗い土の中で目を覚ました。

何故か、土の中にいた。

・・苦しい。

自分が土の中に埋まっている事に対する恐怖が湧いてきて、自分を覆っている冷たい土を掴み、掻き抜いた。

足を使って渾身の力で土を蹴り、全身を使って土を掻く。

繰り返すと段々と土の重さを感じなくなって来るのに気付く。

そして。

ついに腕が外気に触れた。その瞬間、一気に土の中から起き上がる。見ると、見慣れない景色が眼前に広がっていた。

女の髪は燃えるような赤。そして髪と同色のルビーのような瞳

「・・・？」

首を傾げ、軽く頭を振り、手で服についた砂を払いながら辺りを見回す。

「私？私・・・？」

そっと呟き、一步踏み出して穴から出る。

その際に何かを踏みつけた感触がしたので下を向くと、そこには枯れた花束があった。

随分古いものらしくかさかさになっている。

放って置けない気がして、おもむろにその花束を掴んで胸に抱きしめる。

何故か、涙が溢れて来た。

どうして泣けてくるのか分からなかったが、しばらく涙を流し続けた。

涙が出なくなった頃、気が向いた方に歩いていくと目の前には海が広がった。

引き寄せられるように地平線の向こうを見つめる。

行きたい。

でも、と思い首を傾げる。

どこへ・・・？

「待っている、レイラ・・・お前をこんな風にした奴に、必ず復讐してやるから・・・。」

「魔の島」にて、最愛の恋人レイラの冷たい遺体を抱きしめながら、彼の心の底にずっと秘めていた想い。

そして、見つけた。

恋人を殺したのは男、名はジャファル。

すぐ腕の暗殺集団＜黒い牙＞の中でも更に選りすぐられた四人、四牙の一人。

通り名では死神と称されている暗殺者。

ただの密偵と殺しが生活の一部となっている奴。その差は歴然だった。

背後から忍寄り、彼を殺そうとしたが、逆に剣を向けられた。

だが、どう言う訳か奴は自分に止めを刺さなかった。

今度は、自分は奴の弱点である二ノの事を持ち出し、抵抗するなどと脅した。

実際、二ノを傷つける気は無かったが、奴はあっさりと自分の言う通りにした。

やっとレイラの敵がとれる…剣をジャファルに向けた。

（だめ・・・だめよ！！）

突如、頭の中で懐かしい声が響いた。

「！！レ・イ・ラ・・・？」

マッシューは目を見開いた。

「マッシュー・・・。」

レイラが呟く。今思うと、この時、自分は光の中にいた。

「レイラ？本当に、お前なのか？」

「待っている、すぐけりをつけてやる！」

だが彼女は淋しそうに微笑むと手を伸ばし、剣を持っている方の手

に触れた。

「バカね・・・その男と同じ事をする気なの？」

レイラの姿が薄くなる。

「！」

マシューは手を伸ばす。悲しい事に、彼女の体を通り抜けてしまった。

「・・・どこに行くんだ？行かないでくれ、消えないで・・・」

気がつけば、ナイフは自分の手から自然に滑り落ちていた。

消えるか消えないかぐらいになった瞬間、彼女が微笑む。

「どこにも行かない」

彼女の姿が完全に消えた。

「！レイツ・・・」

消えようとする彼女を何とか止めようと手を伸ばしてマシューは・・・

ガバツとベッドの上で半身を起こしていた。

気がつくと彼は、自分が普段使っているオスティア城の部屋の一角にいた。

すぐ近くにあるカーテンを引き、サツと開けると太陽が昇りかけていてうっすらと明るい。

「また、あの夢か・・・」

彼が苦笑する。

彼が見る夢は彼の恋人を殺した男の夢。

正確に言えばその男を殺そうとした場面。けれど殺せなかった。

他でもない、今は亡き恋人レイラが止めたのだ。

それにしても・・・と思う。

自分たちが竜達と戦ってからまだいくらかも経っていないというのに、この（今の所）平穏な町々に住み、暮らしている人々にとって危うく竜との全面戦争になりかけたと言う事実は知る由もないだろう。気分を変えようと窓の外を見ると先程より一層明るくなっている。

「マッシュー、どうしましたか？」

柔らかな声がかけられる。目をやると、レイラとうり二つの女性が心配そうに立っていた。

「いや、何でもないよ…レト」

二人が出会ったのは偶然だった。

マッシューがオスティアの町に出て買い物でもしようとしていた矢先。ちらっと女が目に入った。

燃えるような、赤い髪。

「！君、ちよっと待って！待ってくれ！！」

気がつくのと、夢中で呼び止めていた。

「はい？」

振り返ったその顔が、懐かしい顔に重なる。似ている・・・。

「？あ、あの・・・？」

少し怯えたように娘が言うのを見てマッシューははっとして謝る。

「あ、ああ悪い。知り合いに似ていたもんだから…」

「いいえ。」

少し安心したように娘の顔に微笑が浮かぶ。

「では、失礼致します。」

軽くお辞儀をして娘は去って行った。

マッシューはその娘が気になり、自らの任務に支障が出ない程度に調べる事にした。

すると娘はある家に住み込みとして働いている事が分かった。

しかも、海辺で気絶していた所を助けられ、一部記憶喪失だと言う。

マッシューはオスティアの城主となったヘクトルや、

重臣オズインに娘の事を相談した。

するとヘクトルが、城に雇ってもよいと言ってくれたので、

娘と娘が働いている家の主達に相談をして、

実質的に娘をオスティア城に住まわせる事となった。

ヘクトルやオズインは娘が余りにレイラと似ている事に絶句したが、当の娘は何も気付いていないようだった。

レトがオスティアで働くようになってからと言うもの、

二人はどんどん親密になり、結ばれた。

レトはほどなく懐妊した。

マシューはふと気がつくと、レイラの事を思い出す時間が減っていた事に気付き、

その事に対して後ろめたい気持ちちが芽生え始めた。

レトから気になる事を言われたのは、そんな矢先だった。

「・・・最近、夢を見ます。」

「どんな？」

「夢の中に、私と同じ赤い髪の女の方が出てきました。顔も私とそっくりなのです。ただ一つ違うのは、彼女の瞳は金色なのですが…」

「・・・それで？」

「それだけです。」

「そっか・・・。」

「その方が、私を見て笑いかけてくれますの。」
でも、とレトが続ける。

「何かを言われるのですが・・・聞き取れなくて。気になってしまいますよね。」

「そっか・・・。」

「あのさ、レト。笑わないで聞いてくれるかい？」

マシューは彼女を見つめた。

「はい？」

レトが首を傾げる。

「俺は以前、君に会ったと思うんだ」

「？」

レトが分からない、と言う顔をする。

「俺の元恋人の名前、レイラって言うんだ。」

「レイラ・・・」

「顔も姿も、君とうり二つなんだ。俺は、君が彼女に思えて仕方が無い」

「マシュー・・・」

「その、声も」

マシューは頭を抱えた。レトは困ったようにマシューを見て考え込んでいるようだった。
しばらくして口を開いた。

「マシュー。私達、少し離れた方がいいかもしれないわ」

「え？」

マシューが顔を上げた。

「貴方の心の整理がつくまで、オステイアを出ようと思うの」

「出るって：どこへ行くつもりなんだ？」

「あの土地では、何ものにも縛られないから：」

彼女はサカの大地を選んだ。

間もなくレトは男の子を出産した。

名前はチャド。マシューに似た、逆毛の男の子である。

子どもが生まれたと聞いて、マシューはすぐにサカへ向かった。

既に自分の中で気持ちは決着がついていた。レトとチャドを守るのだ。

だが、マシューが到着する前、レトはひどい頭痛に襲われた。

「うっ・・・」

何！？何なのこの頭痛は？

「レト！？」

ちょうどそこにマシューがたどり着いて、レトを抱きかかえた。

「大丈夫か！？」

「私・・・私・・・どうして？」

「レト・・・？」

「マシュー・・・」

彼女が大きいため息をついた。口調がレトではなくなっている。

「どうした？レト。」

「レト？私はレイラ…」

「！そんな・・・レイラは死んだ。四牙の一人に刺されて」

「そう、私はジャファルと言う男に刺されて死んだ。」

レイラがゆっくりと言葉を紡ぐ。

「エフィデルが…あの男が実験をしたの」

レイラの脳裏には、刺された後の出来事が甦ってきた。

「エフィデル？実験？」

「あの男…分からない、でも何かに吸い込まれて、吐き出された時には体から抜けていたの。…それからずっと漂っていた。」

レイラは知らなかったが、エフィデルは殺害後すぐ、死体を運ぼうとしたジャファルを呼び止めて、

面白半分に、レイラの体にエーギルを注いでいた。

結果、体は完全には死に絶えず、

レイラの魂は彷徨いながらも中途半端に繋ぎ止められていた。

「だから、あいつに止めを刺そうとした時に止める事が出来たのか。」

ジャファルに剣を刺そうとした時、レイラはそれを止めた。

「そう。・・・ずっと、あなたの側にいたから。」

レイラは悲しそうに頷く。

「何かの弾みで・・・私は元の体に戻った。けれど・・・何一つ思い出せなかった」

そう、その方が良かったのだ。

けれど、こうして元の記憶が戻って来たと言う事は、時間が戻り始めていると言う事だ。全て、何も無かったように。

「体が、限界に来てしまっているの」

マッシュは顎を撫でた。必死に自分の考えをめぐらせる。

「嫌だ・・・レイラ・・・」

「こうしている間にもどんどん何かが無くなっていく。

あなたの事も、チャドの事も・・・耐えられない。」

「……………」

マシューの目から知らない内に涙が溢れてきた。

「こうは考えられない？あなたは夢を見ていたの。

あなたが今泣いているのは、この夢から醒めたくないから」

「チャドはどうするんだ、あの子は現実にいる。

俺と、君の子だ。子どもには母親が必要だ。」

「そうね・・・あの子だけが夢で終わる筈だった私とあなたの、唯一つの現実だわ。

でも・・・あの子をお願い。ごめんね、チャド、マシュー・・・私は幸せだわ。」

チャドを愛しそうに何度も撫でていたレイラはニコツと笑うとすと目を閉じた。

瞬間、その体は散って消えた。あたかも、最初からいなかったかのように。

マシューはしばらくその場に立ち尽くしていた。

マシューはすぐ荷物をまとめ、チャドを大切に抱きかかえると、フエレへ向かった。

フエレのアラフェン：そこに、かつての仲間が建てた孤児院がある。目的は息子を預ける事。

仕事のかさむ自分では到底満足に面倒が見きれない事が分かりきっているからだ。

訪ねると、金髪碧眼の、美しい修道士であるルセアが出迎えてくれた。

事情を話すと分かってくれ、預ける事を承知してくれた。

そしてチャドには両親の事を言わないで欲しいと、

もし言うとしても、死んだと伝えてくれるようにと頼んでおいた。

マシューは任務でベルンとオスティアを往復する中、
何度かこっそりと孤児院を訪れていた。そんなある日のこと。

「ルセアさん。ども、こんにちは」

「マシューさん」

ルセアが笑顔で出迎えた。

「お久しぶりです。チャドは元気っすかね？」

「ええ、とても元気ですよ。それに、ほら、見てください」

ルセアが示す方には、

4、5歳程の、緑の髪に碧眼の可愛らしい双子が仲良く並んでいて、
彼らの正面に、双子より年上の、茶色い逆毛の男の子がいて、
兄さんらしくあれこれと世話をやいていた。

「すっかりいいお兄さんになってますよ。そうそう、彼は最近絵を
描くんです」

ルセアが目を細めてチャドを見た。

「そうですか、絵を…」

マシューの胸は痛んだ。チャドの側についてやれない自分かも
どかしい。

だが、それを表に出さずに言う。

「チャドの側にいる彼ら、双子ですか。可愛いですね」

「ええ、最近来た子ども達です」

ルセアはそう言ってため息をつく。

「覚えてらっしゃいますか？ ジャファルさんと、二ノさんの子供た
ちですよ。」

「！ジャファルと…二ノ…？」

久しぶりに聞く今は亡き恋人の仇の名、

そしてその男に無邪気に甘えていた少女の名にマシューの胸はざわ
つく。

当時の事が鮮明に思い出された。

「あ！ジャファル！ジャファルこんなとこにいたっ探したんだよ！
！」

自分がジャファルを殺そうとしたのをレイラに止められ、奴が去った後だった。

目の前にいる双子と同じ髪と瞳の色、
二ノが嬉しそうに駆け寄って来るとジャファルに：
あの死神と言われた男に抱きつき、子猫のように彼の胸に頭を押し付けた。

奴に向けられる眩しいまでの、笑み。

そしてジャファルも一度、二度軽く彼女の髪を梳いてやる。

「……………」

それを見てマシューは目を閉じ、意識を集中する。

（ばかね・・・あの男と同じ事をするつもり？）

レイラに言われた言葉が思い出された。

自分はあの娘の笑顔を永久に失わせる所だったのだ。

「・・・さん？マシューさん？」

ルセアの言葉に、マシューはハツとした。

「あ、ああすみません。ちょっと色々思い出しちゃって……………」

「そうでしたか……………」

「二人は今、どうしてるんです？」

ルセアは首を横に振った。

「残念ながら・・・行方は知れません。」

「え？」

マシューは目を見開く。ルセアは目を伏せながら言った。

「黒い牙にいた人々に、賞金が懸けられたとか。」

「……………」

「二ノさんは…彼女が彼らを預けに来たんです。彼を追いかけたようですが…」

彼らの無事を祈るのみです。それしか出来ない。」

ああ、とマシューは思う。あの男は、未だに闇に追われているのか。

「…はい。」

自分の子どもであるチャドが、
これから彼らの子供と共に育つのは何かの縁だろうか。
仲良さそうに並ぶ3人を見て、マシューは天井を見つめた。
（どうか、無事で）
誰に対してと言うわけないが、祈りたくなった。

(後書き)

マシユレイでチャドはありえませんが、
ありえさせたいが為に、この小説が誕生しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1723b/>

生者の書(ジャファル×ニノ、マシュー×レイラ→チャド)

2010年10月14日21時52分発行